

荒川清秀著

中国語を歩く

— 辞書と街角の考現学 パート2

〈東方書店、二〇一四年六月、三二二頁〉

一九六六年、文化大革命開始当初における紅衛兵の躍動には、隣国の同世代の一人として一種の感動すら覚えたと。早速、彼らが手に持つ『毛主席語録』を入手し、学びたての中国語で大声を張りあげる。たどたどしいながらも、時に何やら紅衛兵になった気分に分れるから不思議だ。ナンセンスといわれようとも、至福の一刻であった。だが冷静になって考えてみると、言葉が紡ぎだす思考はいつしか『毛主席語録』の一句一節に絡め取られ、タガが嵌められ、その外に飛び出すことはできなくなってしまう。想像するに、毛沢東時代の中国人の思考は、どのように過激を装うとも、『毛主席語録』の内側で堂々巡りをしていたに違いない。言葉の持つ靈力といっておこうか。

時は移り、開放と経済成長最優先の時代に突入する。日常生活から「赤い表紙の宝典」が消え去り、中国人は毛沢東思想の軛から解き放たれた。改革・開放の波が言葉の世界にも怒濤となって押し寄せ、中国語表現に劇的な変化が生まれる。同時に台湾、香港、東南アジア華人社会と中国との間のヒト・モノ・カネを遮っていた壁が取り払われるや、中国語もまた激しく相互乗り入れをはじめた。孫悟空が天界で大暴れする京劇演目の「孫悟空大鬧乾坤」に倣うなら、まさに「中国語大鬧大中華圏」といった情況だ。おおにちゆうかうかんをまがむがす

天界の最高神である玉皇ですら、ひとたび孫悟空が暴れ出すや取り押さえ鎮めることは至難である。対する著者の荒川氏は、現在の中国とその周辺世界で一瞬の休む間もなく千変万化し進む中国語を、いとも容易く整理し、解説を加え、我々の目の前に示してくれるうえに、その故事来歴まで教えてくれるのだから、有難いことこの上ない。たとえば動く歩道を表す「行走道」

と「站立道」の違いについて、「行走道」とは「歩く道」のこと。ここでの「行走」は「歩く」ことで、これを逆にした日本語の「走行」の「走」が「走る」とは異なる。「站立道」は、現代語における「立つ」の「站」と古典語での「立つ」——「立」が合わさって書きことばをつくったものである。これだけではない。「エスカレーターの立ち位置」の地域別の違いにも目配りを怠らず、「歩く歩道も、やはり「站立道」は右、「行走道」は左である」と。

また最近出版された『全球華語詞典』や『全球華語新詞語詞典』など縮きながら、大中華圏における各国・地域の違いを、言葉の異同を通じて鮮やかに描き出している。

巻末に付された著者を含む三人の専門家による丁々発止の対談は、言語表現と現実世界の複雑微妙な関係を鮮やかに生き生きと浮かびあがらせる。

中国語学の門外漢にとって、この上ない贈り物であることは間違いないといえるだろう。

(樋泉克夫)